

## 元禄期以降の能の謡における「吟」の諸相——五つの「吟」と「吟」の表記「キ」 丹羽幸江

能の謡ではツヨ吟とヨワ吟という二種類の歌唱法を曲の内容に合わせて使い分ける。これまでそれらの歌唱法は音階という見地から深く研究されてきた。室町時代には一つの音階であったものが江戸時代に分化し、現代のように音域の狭い音階を持つツヨ吟と広い音域のヨワ吟に分かれた。現代に生きる我々の「吟」の理解には音階の概念は欠かすことができない。しかし、この視点は近代以降の視点であり、江戸期以前の人々が「吟」をどのように考えていたのかについては別の視点を想定する必要がある。

本研究では、江戸時代の楽譜と謡の解説書をもとに、まだ音階という観念を持たなかった時代の人々が「吟」に対してどのような認識を持っていたのかを明らかにすることを目的とする。現在の歌唱法であるツヨ吟・ヨワ吟以外に中吟、中和をはじめとして様々な「吟」があったこと、とくにこれまで知られてこなかった「キ」という「吟」があったことを示す。さらに、『唱曲弁疑』（1768）をはじめとした謡の解説書では、これらの様々な「吟」を五つにわけて把握し、役柄の違いとして認識していた。さらにこれらの五つの「吟」は旋律型の組み合わせ方によって互いに区別されていた。

能楽研究史上しばしばツヨ吟・ヨワ吟のふたつの「吟」が世阿弥の遺著にある「祝言の声」「亡臆の声」がルーツとなっているのかどうか問題とされてきた。本稿では、江戸期における一つの流れとして、5種類の音曲をしめす「五音」と五つの「吟」が関連づけられたことを指摘する。